

18 レオナルド・ダ・ヴィンチの真筆ではない

《岩窟の聖母》ルーブル版

2019

真鍋友範

現在ルーブル美術館に収蔵の《岩窟の聖母》は、レオナルド作品として知られているが、私は違うと考えている。

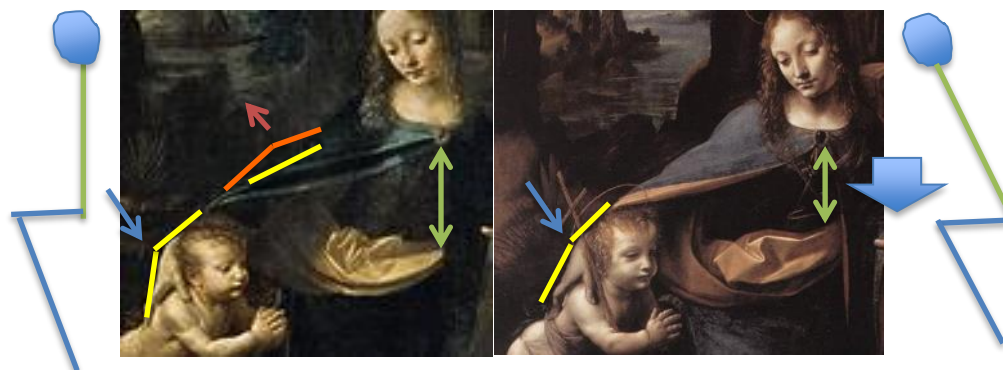
その描画内容面の特徴から導いた結論として、例え当時ミラノにあったレオナルド工房で描かれたという理由でレオナルドの名前を冠していても、レオナルド自身が描いた作品ではないと判定できるのだ。

*本稿は《岩窟の聖母》-秘められた表現と新制作順仮説-2017の一部を抽出し、かつ若干補筆（2019）したものです。

~~~~~

理由1 《ルーブル版》の聖母に見られる貧弱なデッサン技術

《ルーブル版》の聖母の右腕は長過ぎる上、身体に接続できていない。



ルーブル版

ロンドン版

両者の主要な相違点の一つは、聖母の上半身の傾斜角の違いだ。《ロンドン版》の聖母の上半身は少し前方に傾斜しているため、右腕は通常の長さだ。

しかし、ルーブル版では、聖母の上半身が前方に傾いていないため、聖母の右腕は長過ぎるように感じられる。

そして、《ルーブル版》での聖母の右腕の形状が不自然だ。

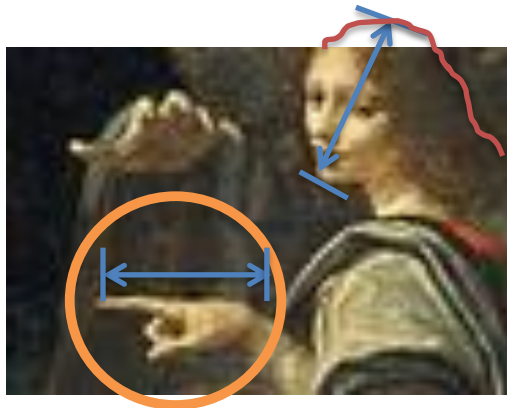
もしも貴方がこの聖母の右手首の角度を真似たならば、貴方の右肘は上方に上がる筈だ。

しかしながら、《ルーブル版》の聖母の右肘は直線のままなのだ。

これは、デッサンとしてあり得ない表現だ。

## 理由2 《ルーブル版》天使の良くないデッサン技術

《ルーブル版》の天使の右手は大き過ぎる上、まるで厳つい男の手でアンバランスだ。



天使の右手は大き過ぎる為、体幹につながらない。

手と頭のサイズを比較しよう。2本のブルー線の長さは同じだ。試しに貴方の右手を顔に当ててみると判るはずだ。

手のひらは顔面と同じサイズだから、明らかに手が大きいのだ。

またその右手は厳つい男の手であり、天使とのバランスが保たれていないのだ。

もとより、エンジェルは両性的に描かれるようだが、この絵画での表現の違和感は拭えないのだ。

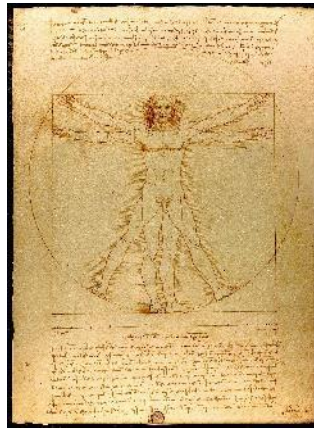
レオナルド・ダ・ヴィンチは人体の骨格と筋肉に精通してい

た。その上、彼は人体図を描いていた。《ウィルトウィルス的人体図》は大変有名な彼の作品だ。彼は人体デッサンの達人でもあったのだ。

しかし、そのレオナルドが《ルーブル版》でそれほど技量の劣るスケッチを描くのだろうか？

恐らく、この絵画は最初に描かれて以来、何度も描き直されていると思われる。しかし、色彩の変化があっても、最初に描かれた形状はほぼ残っていると考えるのが普通だ。

それでも本当にレオナルドが《ルーブル版》を描いたのが真実なら、私は彼を技量の劣る画家として認識せざるを得ないだろう。



《ウィルトウィルス的人体図》 レオナルド・ダ・ヴィンチ

人体を解剖し徹底的に研究したレオナルドが、人体各部のバランスがとれていない人体デッサンを描く事はないと考えられる。

理由3 《ルーブル版》の天使の太ももは、どこにあるのか。



- \* 《ルーブル版》の天使の右足をよく見ると、かなり変な位置にあることが判る。(ブルーの囲み線の中)
- \* 右足は紫の囲み線あたりで見えない筈。
- \* 天使の左足は幼児の向こう側にあるので見えていない。
- \* 白い線は天使の左ひざの傾きを示す

では、左側太ももはどこにあるのだろうか。

天使の左膝（グリーンの輪の部分）は見えるが、左側太ももはどこにあるのだろう。

仮に、天使の左側太ももが、オレンジ色の衣装の後ろにあるのなら、左側太ももは天使の身体に接続していないことになる。

多分、天使の右足の画家は、アンブロジオ・デ・プレディスのアシスタントをしていた画家で、かつ技能の劣る人物ではないだろうか。私は、画家フランチェスコ・ナポリターノと考えている。

フランチェスコ・ナポリターノは、ミラノにあったサン・フランチェスコ・グランデ聖堂にあった現ロンドン版の両サイドの天使画で、左側の緑の衣装の天使の画家だ。

彼はレオナルド・ダ・ヴィンチの弟子のひとりであったが、当時まだ十分な表現技術を持っていなかったと考えられるのだ。

さて、《第一次ロンドン版》に対して、信心会から画面が暗い

と批判された後に描かれた《ルーブル版》では、画面の色調が明るいものに変更されたと考えられる。

色調の明度向上に関連して、《ルーブル版》では《第一次ロンドン版》では意識されていない天使の足先を、しっかり描く必要が生じたと推測される。実際に描かれている場所より、天使の右足は上側になるので、描く必要は無かったのだ。

つまり、天使の右足を描いた画家フランチェスコ・ナポリターノのデッサン技量は、たいへん劣る水準であった。

《ルーブル版》の天使の不正確な形状について気付くなら、レオナルドの描いた作品として見ることはできないのだ。

#### 理由 4 スフマートと明暗法

《スフマート》は明確な外郭線を使うことなく、形状をぼかして他と輪郭を融合させる絵画技法だ。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

『ロンドン版』の画家は、明暗法を用いかなり高度な技術で描いている。

双方の絵画で最も大切な点は、外郭線が《スフマート》で描かれているか否かではなく、輪郭線が暗い背景に溶け込んでいるか否かであろう。

参考-【キアロスкуро】(明暗法)の定義

(絵画上の効果での光と影の部分の処理を《キアロスкуро》

という。-メリアム・ウェブスター辞典)

(特に登場人物の輪郭を強調し、一般的にはその劇的な効果を

生じさせたりするのに、光と影の微妙なグラデュエーション  
下での深く多様な使用をいう。-辞書ドットコム)

イタリア・ルネサンス最盛期に【明暗法】を絵画に用いた表現は極めて少ないと思われる。(ジョルジョーネの《人生の3世代》は、数少ない先進例の作品であろう。)



《人生の3世代》ジョルジョーネ 1510 バルジェッロ美術館

\* 《第一次ロンドン版の岩窟の聖母》は、この作品より早い1483年から1490年に描かれている。

何故なら、ルネサンス期の通常の絵画での光の扱いは『広く薄明るい光』として扱われるのが普通だからである。

私はレオナルドこそ、ルネサンス期における【明暗法】絵画の初期開拓者だと信じている。

レオナルドは岩窟の聖母の《第一次ロンドン版》で既に【明暗法】を使用している。

しかし、アンブロジーオは、レオナルドが師匠のヴェロッキオから習った装飾的な画面表現や師匠が中期に既に表現していた【スフマーティ】で描く技術までは既に学び習得していたものの、師匠と同じ水準の進歩的な【明暗法】で描く能力を保持していなかったと考えられるのだ。

つまり、アンブロジーオは【明暗法】以前の師匠の技法を習得していたことにより、【一枚の絵の中に師レオナルドの初期と中期の特徴を統合的に表現し得た画家】であった。

つまり、ほぼ同じ時期に描かれた2枚の絵画だが、《ルーブル版》はレオナルドの直筆作品ではないのだ。

## 理由5 貧弱な光表現

双方の聖母の衣類を比較したい。

光は聖母の左上側から注いでいる。

《ロンドン版》では、聖母の肩や脚部が強い光が当たっている。

しかし、《ルーブル版》では光線がないのだが、なぜなのだろうか。

《ロンドン版》の聖母は重量感があるが、《ルーブル版》にはそれがない。《ルーブル版》の画家の光の感覚は貧弱なのだ。

しかしながら、《ルーブル版》の画家は当時の一般的なルネサンス期の画家の通常の描画スタイルと言えるのだ。

以上から、《ルーブル版》を描いた画家はレオナルド・ダ・ヴィンチ以外の画家、恐らくアンブロジーオ・デ・プレディスと、助手フランチェスコ・ナポリターノであると私は結論づけるのだ。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

\* 《ルーブル版》の画家は【聖母に当たる光】を意識していない。

理由6 《ルーブル版》の中の天使の背中 of 奇妙なオレンジ色のバッグ

このオレンジ色のバッグは、画面中の彩度がとても高い。  
多分レオナルドは、このようなアンバランスな彩度の絵画は描かないと思われるのだ。



《ルーブル版》

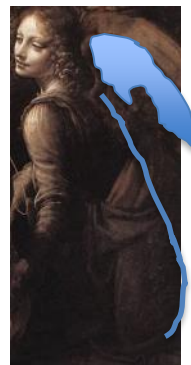
\* 《ルーブル版》では、天使の背の赤い部分の彩度が高い。

\* この色彩は画面のトーンに不釣り合いだ。

理由7 《ルーブル版》の天使の奇妙な背中 of 外郭線



《ルーブル版》



《ロンドン版》

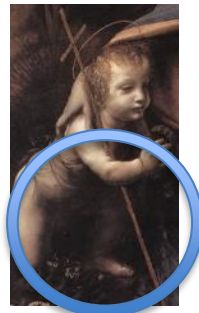
まず、《ロンドン版》の天使の背中 of 外郭線は素直に受け入れ可能な表現だ。しかし、《ルーブル版》の天使の背中 of 外郭線は不自然である。《ルーブル版》では、緑色の想定外郭線も青色のそれも共に奇妙なのだ。



理由 8 《ルーブル版》では、子どものイエスが草地に浮揚しているように表現されている。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

2枚の絵画を詳細に比較するなら、特に子どもの描画に着目すると、《ルーブル版》の幼児は草地の上に浮遊しているように描かれているが、一方の《ロンドン版》の幼児は聖母附近の地面にしっかり着地しているように描かれている。

理由 9 《ルーブル版》の聖母の腰ベルトは技術の劣る画家によって描かれている。表現が奇妙だ。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

たぶんこれは誰もが容易に気付く特徴であろう。ほぼ誰もが、《ルーブル版》の表現を腰の巻きベルトであるとは気付かないだろう。ベルトが聖母の体に巻き付いていないのだ。

理由 10 2枚の《岩窟の聖母》の植物表現の相違

《ルーブル版》の植物は画面全体に細やかで広範囲に描かれている。

レオナルドは若い頃は師匠のアンドレア・ヴェロッキオの影響を受けたことから、同様の植物表現を、彼が1473年にフィレンツェで描いた《受胎告知》に見ることができる。

また、ボッティチェリが1478年に描いた《春》でも、同じ師匠から影響を受けた細密な植物表現を見いだすことができるのだ。

つまり、《ルーブル版》の画家は、例えレオナルド・ダ・ヴィンチではない場合も、それらの表現の影響を受けていると考えられる。

私は理由があって支持しないが、多くの美術史家は、《ルーブル版》に見られる細密で写実的な植物表現や淡く全体的に均一な明かりの配分により、《ルーブル版》は《ロンドン版》が描かれる以前の作品と考えているようだ。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

- \* 《ルーブル版》（上記図版は少々画質が荒いが実際はもっと細密）
- \* 《ルーブル版》では、植物がより広い範囲に装飾的に描かれている。  
これは初期イタリア・ルネサンスの描画様式の痕跡だ。

《ロンドン版》では植物が広い範囲に描かれてなく、より細やかに描かれているのは、前面の花の部分だ。

また、《ロンドン版》の画家は初期ルネサンス様式に関心を示していない。この画家は、【明暗法】によって表現した結果、不必要な部分の表現を省略しているのだ。《ルーブル版》と比べると

と、《ロンドン版》の画家は、人物の表現に力点を置き、人物の周囲の表現には、より少なく力点を置いている。

#### 理由 1 1 構図に統一感がない《ルーブル版》

では、《ルーブル版》《ロンドン版》両者の構図を見比べよう。  
《ロンドン版》では、聖母の頭部中心軸線と天使の頭部中心軸線が幼児イエスの頭部に結束している。

しかし、《ルーブル版》では聖母と天使の【頭部中心軸線】は幼児に結束するよう意識されていない。



《ロンドン版》



《ルーブル版》

《ロンドン版》では【頭部中心軸線】が、有機的に結合しているが、《ルーブル版》では、結合の意識が無く、構図に曖昧さが存在する。その為、登場人物の関係性の表現にあまさが生じている。

つまり、両作品には【構図構築の能力で差がある】のだ。

#### 理由 1 2 聖母の【庇護】動作と天使の指差し動作の矛盾表現

【ルーブル版】では幼児イエスが二人存在することになる。



《ロンドン版》



《ルーブル版》

主体が聖アンナであろうと聖母であろうと、この【庇護】を表す手の身体動作を採った場合、その先には幼児イエスが居るという慣用の図像だ。

《ルーブル版》は、同じ画面中で、天使の指差す先と聖母の左手の前に、幼児イエスが計二人居ることになるという驚きの矛盾内容だ。



《聖アンナと聖母子》 マザッチョとマゾリーノ

1424-25 ウフィツィー フィレンツェ

- \* 聖アンナの左手は、幼児イエスへの【庇護】を意味している。この【庇護】を意味する身体動作は、《岩窟の聖母》の聖母の左手の意味と同じだ。

【ルーブル版】のような誤った構図を、レオナルド・ダ・ヴィンチが採用することは、彼の手記に残る主張からも絶対有り得ないのだ。

《良き画家とは、人物の外表面と（\*身体動作によって）心の内

面を描ける画家だ》 \* ( )は意味を明らかにする為の筆者の説明貼付

### 理由 1 3 同じ画家が描いたとは信じられない表現の相違

同じ画家が、2枚の良く似た作品を残すケースがある。

例えば、一枚目の作品が秀作であるが為、次のライアントから同じ絵を注文される場合などで発生する。

この好例を、バロック画家カラヴァッジョの作品《メデューサ》に見ることができる。

次の2作品を、レオナルドの《岩窟の聖母》2作品と比較していただきたい。



第1作《メデューサ》1595-96（部分）第2作《メデューサの首》1598-99

ウフィツィー美術館

\* 両作品での【メデューサの表情】表現に強烈な共通性を感じ取ることができる。

比較して明らかな点は、カラヴァッジョが《メデューサ》を2枚描いたが、双方に強烈なカラヴァッジョの個性が表出されるという点だ。

ほぼ同じ時期に描かれた2作品の作者は、まぎれなく、カラヴァッジョ自身なのだ。

しかし、《岩窟の聖母ルーブル版》には、共通する強烈な個性が感じられないのだ。

言い換えれば、《ルーブル版》には、レオナルドのデッサンと共通するような、描画上【レオナルド作品の持つ迫真的パワーが無い】のだ。

しかも、それ以上に受け入れられない矛盾とは、同じ画家がほぼ同じ時期に描いたのなら、【絶対にこれほどの描画上の相違は出現しない】という事実なのだ。



《ロンドン版》



《ルーブル版》

\* 【聖母の表情】にも、同一画家と判定し得る共通性がない。

以上 1～13 の理由により、《ルーブル版》はレオナルドの描いた作品ではないと最終断定できるのだ。